

実習報告（基盤教育実習）

体育授業における主体的・対話的で深い学びを導き出す学習カードの工夫 —二人称的アプローチの視点から—

高橋 直希（授業実践探究コース）

1. 探究実習のテーマと設定の理由

現在、保健体育科では中学校学習指導要領解説・保健体育編（平成29年3月告示）にて「生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力の育成」を目標に掲げている。また、『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた授業改善を推進することが求められる」とある。このことから「主体的・対話的で深い学び」に生徒を導くことが豊かなスポーツライフを実現する資質・能力の育成につながると考える。

実習先である佐賀市立S中学校（以下実習校とする）では「主体的・協働的学び」をテーマに掲げS中学校学校研究紀要では「体育分野における主体的な学びとは各単元の特性を踏まえて自らの課題を見つけ、積極的に課題解決に向けて挑戦、取り組んでいく生徒の姿が見られる授業」「協働的な学びとはペアや班の仲間と作戦を立てたり、競争したり、役割を決め対話を重ねたりする活動が見られるもの」と定義している。そこで、実習校では具体的な実践として体育の授業において学習カードに着目し、OPP（1枚ポートフォリオ）を活用している。学習カードについて工藤（2015）は「主体的な学びを支える道具の一つである」としている。ポートフォリオについて西岡（2003）は「ポートフォリオとは子供の作品、自己評価の記録、教師の指導と評価の記録などを、系統的に蓄積していくものである」としている。また、OPPを西口（2015）は「一枚のシートの中で単元における自分の学習による変容が可視的に確認できる」としている。これにより実習校は生徒がOPPを活用することでより主体的・協働的に活動できるような工夫をしている。

しかし私は実習校のOPPの活用には課題があると感じた。なぜならば、授業見学の際に、個人のためあての記入に戸惑っている生徒がいたからである。OPPの利点として前回の振り返りから本時のためあてを記入しやすいという点がある。また、西岡（2003）によると「過程にポートフォリオ検討会を行うことは不可欠である」としている。このことから課題の原因としてポートフォリオ検討会などの教師と生徒、生徒と生徒の対話活動がないことにあると私は考える。そこで現在行っているOPPに二人称的アプローチの視点を取り入れて研究を行っていく。二人称的アプローチとは心理学の理論であり、レディ（2015）によると「見るものと見られる者が入れ替わりながら『あなた』『わたし』という親密でかけがえのない存在として関係を結ぶということ」と述べている。このことから、生徒同士や生徒と教師が「あなた」「わたし」として互いに対話し協働的に活動していくことにより、主体的・対話的で深い学びに導くことができる学習カードの工夫につながるのではないかと考える。そのために私は、探究実習で実習校の学習カードについての活用の工夫と実践を行っていく。

2. 探究実習の研究目標

- ①実習校や生徒についての実態把握
- ②実習校における学習カードについて実態把握
- ③生徒との人間関係作り

3. 探究実習の概要

基盤教育実習では「実習校の体育授業における学習カードの実態把握と開発」をテーマに掲げ、実習を行った。実習日に授業が行われている1・2年生の授業4コマに主にT2として参加をし、授業に参加をする際の主な視点として、①学習カード②二人称的アプローチの2つの視点に絞って行った。

体育授業における学習カードの実態として工藤（2015）は「体育においては、学習カードを活用している授業が多くみられる」「実際の現場では、子供が自分の書いた振り返りを自発的に読み返し、自らの課題をこれまでの学びと関連させながら本時の学びに取り組むといった理想の活用には未だに至っていないのが現状である」と述べている。このことより、まず実習校における学習カードの活用方法を知ることが学校課題探究実習につながると考え、実態把握をしていく。

二人称的アプローチの評価について佐長（2017）は「①対称性②親密性③創発性の3つが欠かせない」と述べている。特に親密性は教師一人で大勢の生徒を相手にしなければならない。また週1回の実習であるため、積極的に生徒とコミュニケーションを取ったり、実習日以外の行事などにも参加したりして生徒との親密性が高まるような工夫をしていく。

4. 探究実習の成果と課題

(1) 成果

今回の実習の主な成果として生徒との人間関係づくりができたことを挙げる。このことは、生徒とのコミュニケーションが増加したことはもちろん、学活ノートの内容が私に向けてのメッセージになっていたり、授業をした学習カードの記録が多くなったりしたからである。これは、授業やクラスの中で多くの生徒と関わり、積極的にコミュニケーションをはかったことや、毎回朝の会や帰りの会で話をしたこと、実習中やボランティアで勤務をした際に毎朝7時から校門前で挨拶運動をしたことが大きな要因ではないかと考える。特に朝の挨拶運動では、ほぼ全員の生徒と必然的に会話をすることができたり、生徒の特徴やその日の変化に気づくことができ、話題が生まれ、コミュニケーションがとりやすくなったりしたため、大きな効果があったのではないかと推察する。したがって、これを成果の一つとする。

(2) 課題

今回の実習の課題として、授業実践におけるその場の対応力を挙げる。実習校では生徒の体力アップを目標に掲げており、授業の開始の挨拶を行う前に①ランニング②縄跳び（2分間）③ストレッチ（30秒）④縄跳び（2分間）⑤脈拍測定⑥トレーニング（グループごと）の6つの過程を行っている。基盤教育実習では、3日間T1として授業を行った。事前に計画を立て、授業に臨んだが、前の時間の授業が長引いて生徒が遅れてきたり、グループごとのトレーニングで活動内容の把握ができていなかったりと思うような授業を展開することができなかった。その結果、研究のテーマである学習カードの記入の時間などを十分にとることができないことがあった。体育の授業は更衣や移動の時間があり、外で活動を行う場合には天候や気温によってもその時々への対応が求められる。また、生徒を主体的・対話的で深い学びに導く学習カードの活用をするために十分な時間を確保することが必要であると感じたため、授業実践におけるその場での対応力を学校課題探究実習では身に付けていきたい。